

策謀に富むオデュッセウス

渡 辺 浩

A: 先生こんにちは。今日は英雄伝説時代の2人目の登場人物ということになりますか?

Q: そうだね。前回のテセウスから1世代後、トロイ戦争の時代からだれか1人を取り上げるとすると、どうもこのオデュッセウスになってしまう。

A: それはどうしてですか?

Q: ホメロスの叙事詩に登場する英雄たちにはいろいろな枕言葉が使われているが、その中で“智謀に富む”、“才智にたけた”、“機略に富む”という枕言葉がつくのはこのオデュッセウスくらいのもので、この点にまぎれ興味湧く。次にオデュッセウス1人を主人公とした“オデュッセイア”がホメロスの2大長篇の1つになっていることも、単に未知の世界を放浪して種々の危険を経験したということ以上に、注目に値するなにかをもっている人物ということになるだろう。

しかし少し調べてみると、オデュッセウスには上のようないい意味の枕言葉だけがついているわけではない。イリアスの第3巻で、トロイの城市イリオンの城門の上に立ったヘレネが、戦場を望みながら老王プリアモスにギリシャ側諸将の名を教えるところでは、“智慧にゆたかなオデュッセウスと申し、……、ありとあらゆるたくみいつわり、また抜け目のないはかりごとも心得ている者でございます”(呉茂一訳)、エウリピデスの作品“レスス”の中のヘクトルの言葉“術策の権化のような狡猾なオデュッセウスというやつ、傲慢にして大胆不敵”(柳沢重剛訳)、また時代が下ってローマ文学になるが、ヴェルギリウスの“アイネイアース”の中で主人公がギリシャを周航してイタリアに向かう途中、イタケーの島を望み過ぎる時の“あれぞ奸智にたけたるオデュッセウスの島……”。

これらが敵であるトロイ側からの表現だけでなく、ギリシャ側総大将のアガ멤ノンまでがイリアス第4巻で“いつも悪がしこい策略に長じて、うまい儲けをたくらんでいるオデュッセウスよ”ということになると、これは尋常ではない。ここまでいわれるオデュッセウスの策謀ぶりを調べてみたくなるのも自然だろう。

オデュッセウスはギリシャ西海岸沿いのイタケー島の

領主で、ケペレーニア、イタケー、ザキュントスの諸島の兵から成る12隻の船団を率いて参戦している。イリアスの中では彼は実戦部隊長の1人であり、軍師や参謀ではない。前線では彼はその剛勇においてギリシャ側を代表する数人の中の1人であり、陣中では常に冷静な判断力のもち主として信望を得ている。イリアスの主題であるアキレウスとアガ멤ノンの不和についても、彼は極力調停につとめ、また全軍の士気の維持に気を配る。ここには“思慮に富む”オデュッセウスはいるが、“策謀に富む”オデュッセウスはいない。第10巻で彼はディオメーデースと2人で夜間偵察に出かけるが——これをトロイ側から見たのが前述の“レスス”だが——ここでの彼の行動にふさわしい表現はせいぜい沈着、俊敏、抜け目のない、大胆、剛勇ぐらいのところだろう。敵の陥穽には陥りそうもない人物だが、敵に陥穽をしかけたりはしていない。

次にオデュッセイアのほうを見よう。これも24巻13,110行とイリアスにつぐ大長篇で、筋書きをここに要約することもできない相談だが、結論的にいうとホメロスに従うかぎり、ここでも彼は策略的とは見えない。彼が10年間も放浪しなければならなかったのも、また10年後に帰郷できることになったのも、オリュポス山上の神々、特に彼を憎むポセイドンと常に彼の庇護者である女神アテーネーとのかけ引きの結果なのである。最初のキューーン人の国での掠奪を別とすれば、10年間の放浪中の彼は次々にふりかかる苦難と災厄に、希望を失うことなく耐え抜いただけのように思える。ただ絶体絶命の窮地に陥ったキュクロプスの洞窟からの脱出には、彼の智略が発揮されたといえるかもしれないが、しかしこの話はまたあまりにもお伽化されてしまっている。

さていよいよ帰郷できる段になったところで、彼は一世一代の策謀をめぐらさねばならない状況にあった。彼の留守宅には近在の領主たちが彼の妻ペーネロペイアに求婚しつつ彼の居館に上りこんで、彼の息子テーレマコスを見捨て、傍若無人に彼の家産を消費し続けているのだった。しかし第13巻で彼はパイエクス人に送られて、眠っている間にイタケーの人気のないところに運ば

フォーラム

れ、1人目ざめるとそこにアテーナーが現れて、留守宅の状況を知らせるとともに、彼の取るべき作戦の大綱も指示してしまい、後はそのとおりに事態が進展するのだから、結局オデュッセイアは策謀家オデュッセウスの物語ではないことになる。この場合彼の智謀は、知恵の女神アテーナーの共感、同情と庇護を誘うだけの役割を果たしたことになる。

A：“智謀に富むオデュッセウス”は看板に偽りありということですか？

Q：そこでホメーロスの狙いについて考え直してみる必要がある。ホメーロスはおそらく B. C. 800 前後の頃の吟唱詩人の1人だった。イリアスやオデュッセイアの素材となる膨大な伝説群の大部分や、登場人物の性格づけ、叙事詩のテクニクとしての定型的ないい回し、形容句、枕言葉に到るまで数百年にわたる蓄積があり、それは同時代の吟唱詩人たちの共有財産だった。ホメーロスがそれらに独自の修正を加えて利用したとしても、それは全体のごく一部だったに違いない。しかしホメーロスの中でオデュッセウスが奸策を用いないことからすれば、“智謀に富む”がホメーロスの選んだ枕言葉で、ヘレネやアガメムノンの言葉はホメーロス以前に定着していたオデュッセウス像の反映と判断するしかない。

A：そうするとホメーロス以前をさぐれば？

Q：ホメーロス以前の作品はいっさい残っていないので、以後の作品から間接に伺うことになる。

オデュッセウスはイタケーの領主ラーエルテースの子として生まれた。彼の母方の祖父アウトリュコスは盗みと詐術の並びない名人であったという。スパルタ王テュンダレオースの娘ヘレネが絶世の美女として成人し、全ギリシャから多数の若い英雄たちが求婚者として集まったとき、オデュッセウスもその中にいたが、そのままでは事態が収まらないことをいち早く見越した彼は、無事に収拾する方策を交換条件つきでテュンダレオースに提案した。それは求婚者の選択はヘレネの意に任せることとし、その結婚についてなにごとかが起こった場合には協力援助することを全員に誓約させるというもので、その結果ヘレネはメネラーオスを選び、オデュッセウスは交換条件により王の一族イーカリオスの娘ペーネロペイアを得たという。

後にメネラーオスはスパルタ王となり、やがてヘレネの出奔が起こった。昔の誓約によって出陣しなければならなくなったとき、オデュッセウスは狂気を装ったが、パラメーデースに見破られた。後に陣中で彼は詭計を用いてパラメーデースを裏切り者に仕立て上げ、アガメム

ノンに殺させたという。伝説に矛盾は避けがたいが、他方オデュッセウスはメネラーオスと一緒に出陣の勧誘にも出かけたらしい。

トロイに向かう途中テネドス島で、ヘラクレスの弓をもつオリゾン人の将ピロクテテースが水蛇にかまれ耐えがたい悪臭を発したとき、オデュッセウスはアガメムノンと計って、彼を1人レムノス島に遺棄した。トロイではまずオデュッセウスはメネラーオスとともに、ヘレネと財宝の返還を要求して城内への使者に立つが、拒絶され、命も危いところをアンテノールに救われる。

イリアスに歌われる10年目の数十日間の戦の後の段階から、彼の働きは圧倒的になってくる。戦死したアキレウスの武具をアイアースと争って獲得する。カルカースの予言でイリオン攻略に不可欠とされたピロクテテースをヘラクレスの弓とともにレムノス島から連れ出してくる。イリオンを守護する神託を知っているヘレノスを待ち伏せして捕える。ヘレノスの述べる落城の条件の実現に奔走する。すなわちアキレウスの子ネオプトレモスを説得して出陣させ、父の武具を与える。イリオン城内に潜入してパラディオンを盗み出す。そうして最後に有名な例の木馬の計を案出し、木馬を作らせ、その中に自ら入って実行を指揮したのがすべてオデュッセウスの仕事とされている。

どの仕事も知恵を必要とすることに変わりはないが、ここで彼を思いきり悪らつな詭計家に仕立て上げているのに、ソボクレスの悲劇“ピロクテテース”がある。ここでは上述の事態の進展と少し順序が違って、オデュッセウスは若く純粋なネオプトレモスとともにレムノス島にやってくる。

彼はこの孤島で辛うじて露命をつないでいるピロクテテースが自分を徹底的に憎み、また策謀家として警戒していることを知っていて、その心理状態と情報不足、ネオプトレモスの純粋な使命感と個人的事情とをフルに前向きに活用する誘拐作戦を立案指示するという老獪ぶりを見せる。

ここまでオデュッセウスへの反感を凝縮させたソボクレスは、ピロクテテースが結局はトロイへゆくことになる結末へと導くのに破綻してしまっている。

ここまで詭計を弄ぶ人物として描くこともできたオデュッセウスを、ホメーロスが前述のように扱ったとき、それは民族の正典となるばかりか、西欧文芸3,000年の原点となるのだった。